

55 早矢仕有的とメデイカルNPO・両幸社

中西 淳朗

わが国最初の日刊紙「横浜毎日新聞」が創刊されたのは、明治三年一月八日のことであつた。それから八ヶ月半たった明治四年八月二十五日付の二二三号の第三面に「両幸社、施し療治の実情訴える」(この小見出しの作製は横浜開港資料館)という内容の記事を見いだした。

その序文は、最近両幸社という組織が方々より莫大な金を集め、社中の者の懐を満たしているという中傷に答え、無料診療の実情を訴える形になっており、この流言の虚偽を解くための意見広告のようである。

今回、この木版刷りの紙面一頁分の記事について、いささかの研究を行ったので不十分ながら報告する次第である。

この記事は、一、目的を述べ中傷に答える、二、両幸

社の無料日曜診療の紹介、三、スタッフ人名の公開、四、収入・支出の公開、五、七ヶ月間の診療統計の公開から成っている。主なポイントは次の如くである。

一、医師の休暇日である日曜日を利用して、医師の乏しい地域で診療を行い、病人を救うための組織を作り活動をはじめたもので、わが社中で謝礼を受けたる医師はいない。

二、活動は明治四年辛未正月より、日曜毎に川崎在なる市場村(現在は横浜市鶴見区市場下町)の真言宗光明山金剛寺に社中が出張し医療を施している。余暇のない社中は多少の金を出して薬剤や器材を求める費用を支えている。

三、スタッフ人名

○両幸社世話人 三名

横浜姿見町 中村次兵衛、同堺町 長谷川亀吉、亀菜煎餅店か)、同北中通り 野沢半兵衛(衣料貿易商か)。

○施術人 六名

浦井宗一、杉本諒三、伊藤賢吉、明石芝三、岡嶋 淡、中嶋桑太。

○施薬人(募金賛同者)

明治四年辛未正月二日、早矢仕有的、丸屋善八の他、施術人六名が平等に夫々二両二分を出し計二十両が集まっている。

同年正月十五日、追加資金十五両集まる(この正月中に早矢仕は七両二分、丸善は十両、中嶋は五両を出している)。

四月二十日以降四囲にわたって、一般市民十九名が参加し、資金は三十八両三分が集まった。賛同者の中で演者の知る氏名は、佐藤佐吉(岩亀楼主人)、近江屋栄助(洋糸輸入商)、中山沖右衛門(両替商)、越前屋惣兵衛(呉服商)、橋本銀太郎(亀甲煎餅か)ぐらいで他はてがかりが把握できなかった。

四、資金収支

収入 七十三両三分

支出 六十両三分一朱と錢四百二十文

残金 十二両三分二朱と錢二百二十文

五、診療統計(明治四年正月より七月迄)

患者 延二百九名(うち、男九十九名、女百十名)、一

日平均七名強

○疾病別、眼病五十七、消化器病五十四、心及び血液病三十八、熱病十九、呼吸器病十、脳及び脊髄病八、腫物七、梅毒六、リウマチ五、水腫病三、尿道病一、子宮病一となっている。

(まとめ) この両幸社なる組織の中心は早矢仕有的と考えられ、有的と丸善に交際のあった人達が多く参加したようである。当時は有的が横浜にきて三年にも満たず、堺町に創った医学塾静々舎と丸善の手のとどく範囲内での呼びかけにとどまったのではないか。

施術人の医師の中に、この時代、有的と共に横浜の検梅事業に参加していた浦井宗一、伊藤貞吉を見出すことも注目される。

この様なボランティア活動には、大商人の賛同が必須であるが、小規模企業主の寄せ集めの組織では永續しなかつたのであろう。その後の報道はない。

へボン先生を目標としたとしても、社会全体の発達が未熟な世情を見透せなかつたのは、有的の甘さと思われる。

(神奈川県方志)